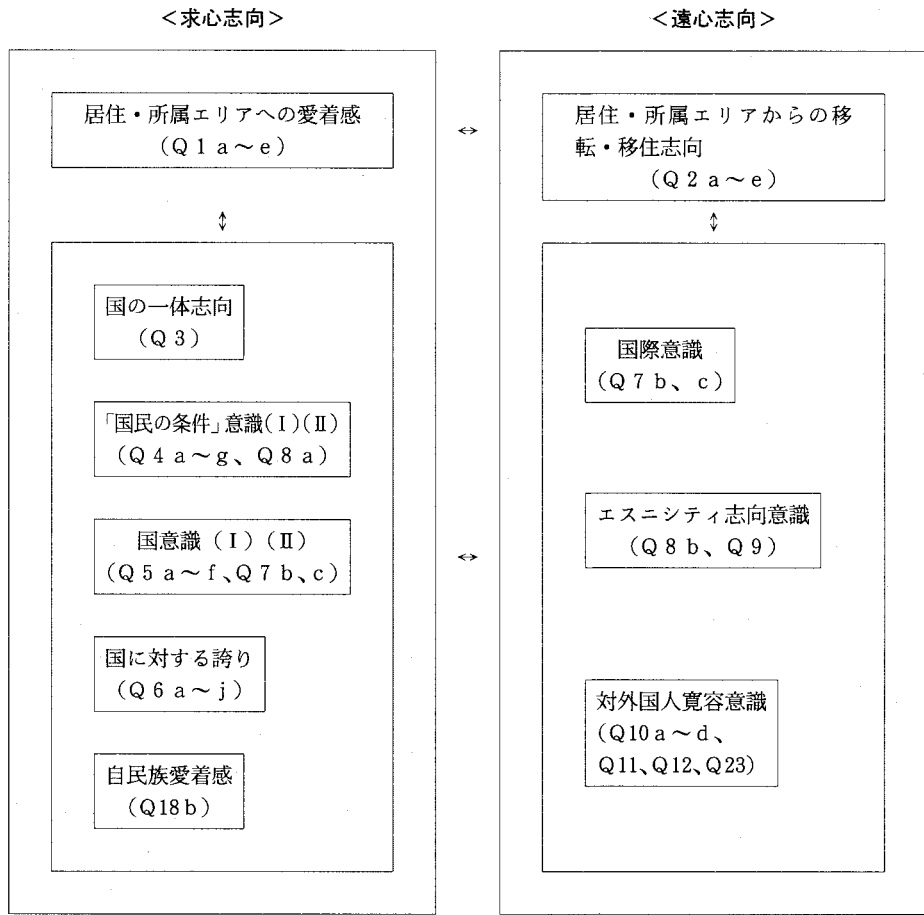


図1 調査の仮説的図式



をいい、ネーションの統合性や一貫性を確保するものである。まずネーションのどの要素に自己を同一化するかによって、ナショナル・アイデンティティは異なったものになる」とされている(矢沢修次郎「ナショナル・アイデンティティ」『新社会学辞典』有斐閣、1993年)。ナショナル・アイデンティティをこのように捉えておくとするならば、今回の調査の質問諸項目はまさにこのような意味でのナショナル・アイデンティティを構成する、あるいはそれとかがかり合いのある諸項目であることがわかる。そこで、その「構成」あるいは「かかわり合い」の仕組みであるが、それについては仮説的に図1のような図式を考えておきたい。

この図式のなかの諸変数は、いずれも人びとが「ネーションのさまざまな要素に同一化すること

によってできあがる確信や感情」とかかわり合いのある諸変数であるといえるのであるが、左側の枠内の諸変数がそれに対してプラスあるいはポジティブなものであるのに対して、右側の枠内の諸変数はマイナスあるいはネガティブなものという、その「かかわり合い」についての意味的な相異がある。そこで、「自分の居住する、あるいは所属するエリアへの愛着感が強くなればなるほど、ほかのエリアへの移転・移住志向は弱くなる」、あるいは「国意識が強くなればなるほど、国際意識・エスニシティ志向・対外国人寛容意識は弱くなる」といった関係が想定されることになる。つまり左右の枠内の諸変数は同じ次元・軸の上のプラスの極とマイナスの極という関係にあるという仮説が立てられるのである。

以上の考察から、今回の調査の質問諸項目につ